只見短歌会　十二月詠草

大塚栄一　指導

受験校やうやく決めし女の孫の口数多く夕餉賑はふ　古川　英子

忙しなき年の瀬なればスーパーにシクラメンの蕾多きを選ぶ　馬場　八智

山近く住めば日の出の光飛び西空に見る朝焼けの雲　小倉キミ子

気付かずに立ち居する我に看護師はひそと寄り来て肩を叩くも　目黒　富子

亡き母の倒れし年ぞ我が齢病みて十年今日は命日　渡部ゆき子

訪ねたき人らを思ひ時流る我が日常に師走を迎ふ　関谷登美子

年の瀬も迫りて掃除そこそこに捲らぬ日めくり片付けてをり　渡部ヨリ子

保育所より帰りし曾孫リュック開け得意気になり連絡帳出す　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　一月例会

目黒十一　指導

騙すよに消えてしまいり冬銀河　順子

巻尺の戻る速さに隙間風　都

冬晴れや天草五橋キャンバスに　修一

隅田川揺らしつつ師走夜景かな　洋子

爺傘寿婆の喜の寿や初日浴ぶ　一穂

昼灯すガソリンスタンド雪催ひ　味代子

三日降り四日目の晴れ屋根なだれ　アツ子

雪はげし訪う人もなかりけり　弘子

今にして背丈に並ぶ雪の嵩　吉児

ダンプ押すや鼻毛凍て付く今朝の冬　恒夫

極月を肌に然りと灯油注ぐ　幸生

裏を見せ道敷く朴葉明日は雪　礼

寝ころんでスマホで見るか雪便り　信

風花やバレリーナのごと青空に

冬の野や人見えずして暮れるなり

兄の星一つ加えて冬銀河

年毎に守られし馳走年新

除雪あと先づ手を温め缶コーヒー

去年今年静かすぎるや老二人

丑三つのスーとつめたき隙間風

風花や米寿の舞の凛として

病みてよし小さき夢や着ぶくれて

人集う道の幾筋恵方とし

寒満月しずかに峡を照らしけり

誰れ彼れの声近ずきぬ返り花

夕時の居間何時になき雪明かり